



謝辞

浅野 純次

(経済倶楽部理事)

▼5月末の理事会で理事長を退任しました。2004年1月から9年余り。いい潮時と思っています。この間の講演会は420回、この欄の執筆は113回に及びました。毎回の講師の質については胸を張っていると思います。司会やこの欄の出来はどうだったか。

▼というわけで、最終回は講演と講演録についての裏話です。多少の手前味噌はお許しください。昨年11月号のこの欄で「講演会の内幕」と題して書き記したので補足になります。講演で大事なものは講師とタイミンと演題です。いつも教週間先を想像しつつ講師とテ

ーマを考えるのですが、まぐれ当たりもあり、時機はずれもありが実態でした。講演録を見ると、閉会の辞で「タイミンは最高で」などと結構しばしば言っているのは我ながらずうずうしかったかもしれません。

▼質疑応答は講演の大事な要素なので、就任早々の2004年4月から始めました。意見や質問が出ないと講師にも申し訳ないのでいつも私が割って入るつもりではいました。良い質問をしてもらえたと思うときが多かったですが、自分で質問したいのを我慢したことも時折ありました。それにしても老齢の女性講師が以前、「質疑なんて失礼だ」と壇で怒り出したのはびっくりしました。「質疑」が「疑義」だと憤慨したのです。それもあって少し考え講演録の該当箇所を【質問】から【会員】に変えました。

▼開会、閉会のコメントが楽しみだと言ってくださる方が少なからずおられたのは司会者冥利に尽きました。でも冒頭の講師紹介で舌禍を引き起こして講師が

憤慨、退席という場面がなかったのはありがたいことでした。内心、ヒヤッとしたことは0・何パーセントかはあったのですから運がよかったでしょう。

▼さて講演を文字にするのはなかなか大変です。講師からたびたび「私の話がこんなにびかびかになって」と喜んでいただけたことは私のひそかな励み(書いてしまったのでひそかではなくなりました)でした。どんなふうに出来るかといえば、まず速記が上がってきます。澤速記のお嬢さん方の速記の質はいつも最高でした。それを塚田事務局長が三本、私が一本、粗編集して講師に送ります。文字どおり真っ赤に赤字を入れてくる方、削除箇所だけの方、中には「一切お任せする」という講師もいます。

▼戻ってきた四本を長時間かけて磨くのが次の仕事です。元は高価で良質なダイヤの原石のようなものですが、磨けば磨くほど光り輝いてくれる。まさに研磨士の趣でパソコン上の戦いが始まります。ポイント

は以下のようなことです。①わかりやすい表現、文脈にする。②無駄な文章をそぎ落とす(高承のとおり、言うまでもなく、後ほど触れますけれども、等々は消えていきます)。③事実関係を確認する(人名、年月、地名など)。④文頭文末を改善する(接統詞の改善、「思います」「わけです」などが多発する話法の改変など)。⑤補足(ふりがな、英語のつづり、語句の説明など)。⑥長い文を句点で切り、かつ改行を工夫する。

▼これを原稿段階で三回、校正で二回、繰り返し編集しながら進めると、誤植はほぼ消え(ほぼ、ですが)、(おおむね)すらすら読める文章になります。大事なのは講演内容の本質はいつさいいじらないこと、講演会の臨場感を大事にすること、です。ここまでやれば講演の本身は私の頭に完璧に定着しそうなものですが、研磨士が光り輝くダイヤを手中にしえないのと同様、頭の中を素通りしてしまうばかり…。ということ、長い間ご愛読ありがとうございました。